

電話日本語授業とその授業方法の 有効性についての研究

秋山朋子*・崔英淑**

Regarding existing research into a class over the phone, there was research related to English; however, few researches have been done on the Japanese language class over the phone. Therefore, this paper tested which one between a textbook-oriented class and a free-talking class is more effective as a teaching method for a class over the phone, aimed at students at C University in Daejeon metropolitan city. Then, the paper proved the effect on the improvement of speaking proficiency, listening comprehension, and reading. As a result, the effect of a free-talking-oriented class was approved more than a textbook-oriented class in speaking proficiency and listening comprehension. In addition, in the reading area of JPT (Japanese Proficiency Test), whereas the effect of a textbook-oriented class was not approved, the effect of the free-talking class was approved.

Based on the results obtained from this paper, it is thought that free-talking enables participants to undertake input, interaction, and output, and the free-talking class appears to be more adequate for being a class over the phone rather than a textbook-oriented class.

Key words: Japanese language class over the phone, meaning transaction, Correlations of four functions, Interaction, Input, Output
(日本語電話授業、意味交渉、4技能の相関性、インタラクション、インプット、アウトプット)

1. はじめに

最近、インターネット、スマートフォンなどの普及により、外国

* 第1著者、忠南大学校人文大学日語日文学科 招聘教員

** 交信著者、忠南大学校人文大学日語日文学科 副教授

語の授業形式のひとつとして電話、また映像による母国語話者との1対1の授業が注目されている。いつでもどこでも、時間や授業場所にかかわらず、授業が行え、通常1対1の授業であるため、学生の水準にあわせた授業ができる。以上の理由から、大学の通常授業、すなわち教室授業では、教師による個々の学習者へのインタラクション、個々の学習者のレベルに合わせた授業などが行ないにくいという点があるが、個々の学習者に合わせられる電話授業は教室授業では行なえない以上の点をカバーすることができるため大学生においても補助的授業として有効だと考えられる。また、効果的な日本語習得のためには非母語話者の学習者たちに対し目標言語の使用体験、要するに母語話者とのインタラクションを行う場を提供することが必要である。そこで母語話者とのインタラクションを可能にする電話授業において、より効果的にインタラクションを行うための授業方法を考えてみたいと思い、今回電話授業に対する実験を実施した。

現在まで、英語における電話授業の有効性に対する先行研究によって電話授業の有効性はさまざまな点で実証されてきたが、授業方法に対する先行研究は行われていない。

今までの先行研究および学習機関すなわち塾、学院などで行なわれている電話授業においても、通常教科書を使用しているが、本稿では、電話授業におけるより効果的な授業方法を検証するにあたって、教科書中心の授業と母語話者とのインタラクションを可能にするフリートーキングを中心にした授業という2タイプの授業の有効性を比較することにした。

2. 本研究の論理的背景と先行研究

2.1 本研究の論理的背景

「学習者が理解可能なインプットのみが言語習得を促す」と唱えた

Krashen(1982,1985)のインプット仮説を土台にして、「学習者がインプットを得た際に、インタラクションによってそのインプットが理解可能になる」とLong(1983 a , b)はインタラクションの重要性を唱えた。その後Long(1996)はインタラクションの際の「意味交渉(negotiation of meaning)」の働きが重要であると主張した。白畑他(2010)は意味交渉について以下のようにしている。

「意味交渉とは、学習者とその対話者が、コミュニケーションの流れを阻止するような問題を克服するために互いの発話を音韻的、語彙的、そして文法的に調節することを言う(Pica1992)。相手の発話の意味が理解できない場合、相互理解を得るために、明確化の要求や理解確認などのフィードバックを相手に返すことになる。フィードバックを受け取った相手は(中略)伝わらなかった発話を繰り返すか、または発話を修正したりする。(中略)このように意味交渉は単にインプットの理解を促すためだけのものではなく、学習者が自分の中間言語システムの意味的および文法的な問題に気づき、誤りの修正を促す上で重要だと考えられている³⁾。

また、Swain(1985,1995)は理解可能なアウトプットを行おうと努力することを通して「気づき」「仮説検証」「統語処理などの認知プロセスの促進」が行われると述べている。言い換えると、学習者はアウトプットすることにより、自分の言いたいことと言えないこととのギャップに気づき、意味と形式に対する仮説を立て、発話を完成させた後それが正しいかどこが間違っているか検証し、言語習得を促進させていくということだ。

このように理解可能なインプット、インタラクション、アウトプットを行うことにより学習者の中間言語⁴⁾の誤りは修正されていき、学

3) 白畑知彦・若林茂則・村野井仁(2010)『詳説第二言語取得研究—理論から研究法まで—』研究社、pp.147-148.

4) 中間言語(interlanguage)とは第二言語学習者の言語の総称であって抽象的な概念である。

習者の中間言語は向上していく。

本稿では電話授業におけるフリートーキングでのネイティブスピーカーとのインタラクションの中で、意味交渉、アウトプットによる「気づき」「仮説検証」などが行われるため、学習者の日本語の習得が促進されるのではないかと仮説を立てる。

2.2 電話授業に対する先行研究

電話授業についての研究としては、Traff(1997)、박은영(2002)、권미영(2007)、정숙경(2012)と반규현(2012)の研究が見られる。Traff(1997)は電話を使用した外国語学習(Ingalik Athabaskanという言語を使用した)が可能であることを報告している。韓国内では박은영(2002)が英語の電話学習が英語の聞き取り能力と話す能力の流暢性、口頭英語コミュニケーション能力、学習者の創造的能力に良い結果を与えたと主張している。권미영(2007)は英語の電話授業が学習者の流暢さと複雑性の向上に役立ったと報告している。정숙경(2012)も英語の電話授業が話す能力の向上に役立ったとし、반규현(2012)は内的動機が英語の電話授業のレベルテストの結果の向上にかかわっていることを報告している。Traff(1997)を除いた電話授業の研究は韓国内における英語の授業である。

以上のように英語における電話授業の研究は見られたが、電話授業による日本語習得研究は見当たらないのが現状である。

3. 実験概要

3.1 実験対象

本研究の被験者は韓国大田広域市内のC大学で日本語を専攻している者の希望者20名のうち、授業をほぼ毎回受けた学生10名である。10人の日本語能力のレベルはJLPTを基準にして、N2レベル2人、

N3レベル1人、N4レベル1人、N5レベル6人である。被験者を希望者に限ったのは、モチベーションによる実験への影響を抑えるためである(ドルニェイ 2005)。また、同理由により、授業を毎回受けられなかった被験者10名は実験結果から除いた。

被験者ABCDEは意味交渉を中心にしたフリートーキングの授業、被験者FGHIJは教科書中心の授業を行った学生である。後述のとおり、被験者の授業形式の選択は被験者の意思によるものである。

実験に入る前、被験者に対しビリーフ、過去に受けた外国語授業、学習者の嗜好、遺伝、性格に対するアンケート調査を行って学習者の内的要因からの影響の有無を判断した。アンケートは、村野井仁(2006)の第二言語学習ストラテジーリスト(pp.132-134)、PRCA-10(p.122)と、ビリーフ調査ツールであるBALLI(Horwitz, 1987)を参考にして作ったものである。表1は今回行ったアンケートの質問項目の一部である。

〈表 1〉被験者へのアンケート調査の項目

①	高校時代、英語の授業でロールプレイをよく行った。
②	高校時代、英語の授業は文法中心だった。
③	高校時代、英語の授業は問題を解くのが中心だった。
④	高校時代、英語の授業は先生の話の話を聞いているだけのものだった。
⑤	高校時代、英語の授業は黒板に書いてあるものを書き写すものだった。
⑥	高校時代、英語の授業はフラッシュカードを使用した。
⑦	高校時代、英語の授業は会話中心だった。
⑧	高校時代の英語の授業の方法が最も正しい外国語の授業だと思う。
⑨	教科書中心の授業が好きだ。
⑩	教科書的な正確な日本語授業よりは実際に使用できる日本語を勉強したい。
⑪	会話中心の授業が一番好きだ。

⑫	電話で行う日本語の授業は日本語の話す能力の向上に役立つ。
⑬	電話で行う日本語の授業は日本語の聞く能力の向上に役立つ。
⑭	電話で行う日本語の授業は日本語の読む能力の向上に役立つ。
⑮	電話で行う日本語の授業は日本語の書く能力の向上に役立つ。
⑯	電話で行う日本語の授業は日本語の発音能力の向上に役立つ。
⑰	両親、兄弟の中に外国語が上手な者がいる。
⑱	私は話すのが好きで他人との会話を楽しむほうだ。

被験者へのアンケート結果を表2に示す。数字の意味は、1が「非常にその通りだ」、2が「その通りだ」、3が「どちらでもない」、4が「違う」、5が「まったく違う」である。但し、質問項目⑰においての数字の意味は、1が「家族全員上手だ」、2が「何人か上手だ」、3が「1名上手だ」、4が「0名」、5は「分からない」である。

〈表 2〉被験者へのアンケート結果

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
A	4	2	1	1	4	5	5	4	5	4	2	2	2	2	2	2	4	4
B	4	1	1	2	2	5	4	5	4	5	1	1	1	1	1	1	4	2
C	5	2	1	2	3	5	5	5	3	4	2	1	1	3	3	1	2	2
D	5	1	1	1	2	4	5	5	4	4	1	2	2	3	3	2	1	2
E	2	3	1	2	2	4	4	5	4	4	1	1	1	4	4	3	4	1
平均	4	1.8	1	1.6	2.6	4.6	4.6	4.8	4	4.2	1.4	1.4	1.4	2.6	2.6	1.8		2.2
F	4	2	1	1	2	4	4	5	4	3	1	1	1	1	1	1	3	4
G	5	2	2	2	3	5	5	3	2	3	2	3	3	3	3	3	4	3
H	4	2	2	2	2	4	4	4	3	4	3	2	2	2	3	2	4	4
I	5	1	2	1	2	5	5	5	4	5	2	1	1	1	1	1	1	1
J	4	2	1	2	1	5	5	4	3	4	3	2	2	3	3	2	4	3
平均	4.4	1.8	1.6	1.6	2	4.6	4.6	4.2	3.2	3.8	2.2	1.8	1.8	2	2.2	1.8		3
1:非常にその通りだ 2:その通りだ 3:どちらでもない 4:違う 5:まったく違う ⑰の質問の答え 1:家族全員上手だ 2:何人か上手だ 3:1名上手だ 4:0名 5:分からない																		

表2から、フリートーキング群のABCDEは教科書群のFGHIJに比べ、話すことが好きで会話を楽しみ(項目⑩)、会話中心の授業を好む(項目⑪)傾向が見られる。反対に教科書群はフリートーキング群に比べ教科書中心の授業を好む(項目⑨)傾向が見られた。このことから、両群とも自分の好みの授業を選択しているということが言える。また他の項目についての顕著な違いは見られず、遺伝についての項目⑬についても両群のばらつきが同じような状態だった。以上の結果から今回の実験における学習者の内的要因からの影響は余りないと判断した。

3.2 電話授業の実施期間

電話授業の実施は、2013年4月8日から2013年6月7日にかけて行われた。途中、中間試験期間(2週間)は電話授業を中断している。

3.3 授業方法

3.3.1 授業時間

電話授業の現場に従って授業時間を1回10分にし週3回行った。

3.3.2 授業実施の時刻

時間帯は学生の希望する時刻に行ったが、それは被験者の負担を少なくし、モチベーションの実験への影響を抑えるためである(ドルニューイ 2005)。

3.3.3 通話方法

スカイプの音声通話を基本的に使用したが、スカイプの状態不良や被験者の環境によって携帯電話から電話をかけて授業することもあった。

3.3.4 授業形式

教科書使用群とフリートーキング群に分けて授業を行った。ただし、フリートーキングの被験者に対して実験開始時は教科書を使用しようとしたが、被験者の学習環境、被験者の要望などによって教科書中心ではなくフリートーキングの授業を行っている。

フリートーキングも教科書使用の授業もともに、被験者の間違い、分からなかった単語はスカイプのメール欄を使用したり、授業の内容を録音し、その録音ファイルを被験者に送り、フィードバックした。

使用教科書は市販のものを使用した。入門は本筆者の執筆教科書であり他の市販の教科書と内容を比較、検討し比較的丁寧な文法解説が載っていると判断し使用した⁵⁾。初級、初中級、中級では最後にフリートーキングができるように工夫されているものを教科書の筆者の許可を得て使用した⁶⁾。

3.4 評価

本実験では、電話授業方法による有効性を調べるために、聴解、読解と話す能力を評価した。

実験開始前と実験開始後に市販のJPT模擬試験を行った。聴解と読解の問題各100問のうち問題1問に対して1点として採点し、その点数に対しt-検定を行い、効果の有無を判定した。但し市販のJPT模擬試験問題集は筆者の許可を得て使用している⁷⁾。

話す能力に対する評価は4人のネイティブスピーカーの日本語教育者に授業の初期と後期の各々10分間の録音ファイルを聞き、SJPTの

5) 강봉식·최영숙 외(2003) 『NEW일본어회화첫걸음』 시사일본어사, pp.1-258.

6) 나가하라나리카쓰(2008) 『우키우키 일본어 회화코스 초급편』 넥서스, pp.1-104.

_____ (2008) 『우키우키 일본어 회화코스 초중급편』 넥서스, pp.1-168.

_____ (2008) 『우키우키 일본어 회화코스 중급편』 넥서스, pp.1-168.

7) JPT초고수위원회(2010) 『시나공 JPT 실전테스트』 길벗이지톡, pp.16-52.

基準を参考にし、100点満点で評価を行ってもらった。その結果に対しt-検定を行った。

4. 実験結果

4.1 電話授業実施前後のJPT模擬試験の結果

電話授業の実施の前後に行ったJPTの模擬試験の結果を表3に示す。

聴解と読解の問題各100問のうち問題1問に対して1点とし採点し、その点数に対しt-検定を行い効果の有無を判定することにした。

〈表 3〉電話授業を受けた学習者のJPT模擬試験の結果(点)

試験 実験群		フリートーキング					教科書				
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
		N5 レベル	N2 レベル	N5 レベル	N5 レベル	N3 レベル	N5 レベル	N5 レベル	N4 レベル	N2 レベル	N5 レベル
聴解	実験前	35	67	43	22	70	30	38	47	72	37
	実験後	42	78	51	38	82	36	40	53	79	43
	点数差	7	11	8	16	12	6	2	6	7	6
読解	実験前	8	45	5	4	36	29	28	31	59	26
	実験後	29	46	18	19	57	29	29	38	65	24
	点数差	21	11	13	15	21	0	1	7	6	2

表3の聴解の点数差を見るとフリートーキング群ABCDEは各々7,11,8,16,12となり、教科書群FGHIJは各々6,2,6,7,6となった。次に読解の点数差を見ると、フリートーキング群ABCDEは

各々21,11,13,15,21となり、教科書群FGHIJは各々0,1,7,6,3となった。

以上の結果から模擬試験の実験前後の点数差は聴解、読解共に、フリートーキング群の方が教科書群に比べて大きく、より授業の効果があつたことが分かる。

レベル別にみると聴解の点数差はフリートーキング群のN2が11, N3が21, N5が21,13,15であり、教科書群のN2は6, N4は7, N5は6, 2, 6となった。レベル別の読解の点数差はフリートーキング群のN2が11, N3が12, N5が7, 8, 16であり、教科書群のN2は7, N4は6, N5は0, 1, 2となった。結局、レベルと伸び率は関係がないといえるだろう。

このJPTの模擬試験の結果に対し t-分析を行ったものが表4である。t-分析の有意水準は5%とした。

〈表 4〉 JPTの結果のt-分析

	フリートーキング			教科書		
	点数差の平均	t-値	P-value	点数差の平均	t-値	P-value
聴解	10.8	6.7765	0.002475**	5.4	6.1942	0.003454**
読解	16.2	7.8674	0.001411**	2.4	1.372	0.242

*p<0.05、** p<0.01、*** p<0.001

t-分析の結果からJPTの模擬試験における聴解、読解の点数向上に対しフリートーキングの授業の有効性が認められた。しかし、教科書の授業では聴解の点数向上には有効性が認められたが、読解の点数向上への有効性は見られなかった。

4.2 電話授業実施前後の話す能力の評価の結果

話す能力に対する評価は4人のネイティブスピーカーの日本語教育者に授業の初期と後期の各々10分間の録音ファイルを聞き、SJPTの

基準を参考にし、100点満点で評価を行ってもらった。その結果を表5に示す。

〈表 5〉話す能力評価(点)

実験群		フリートーキング					教科書				
被験者		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
評価者1	実験前	16	81	30	19	83	11	4	18	20	17
	実験後	21	88	41	33	89	13	12	26	26	23
	差	5	7	11	14	6	2	8	8	6	6
評価者2	実験前	14	63	47	13	77	18	27	58	74	48
	実験後	25	72	58	28	85	25	32	67	84	53
	差	11	9	11	15	8	7	5	9	10	5
評価者3	実験前	73	78	71	49	74	57	44	70	68	44
	実験後	82	86	76	61	80	58	55	55	72	47
	差	9	8	5	12	6	1	11	-15	4	3
評価者4	実験前	36	36	44	33	56	14	27	49	59	40
	実験後	39	39	48	42	60	30	31	50	60	43
	差	3	3	4	9	4	16	4	1	1	3

表5の結果からフリートーキング、教科書いずれの群でも(評価者3の被験者Hを除き)実験後は実験前に比べ、話す能力の点数向上が認められた。

表5の結果のt-分析を行ったものが表6である。t-分析の有効水準は5%とした。

表6に示したように、評価者1の採点結果からはフリートーキング群、教科書群の話す能力への電話授業の有効性が見られた。評価者2の採点結果からも両群の有効性が見られたが、評価者3の採点結果からはフリートーキング群の有効性のみが見られ、評価者4の採点結果からも、フリートーキング群のみの有効性が見られた。以上のことか

ら、話す能力に対する電話授業による有効性はフリートーキング群でも教科書群でも認められたといえるが、フリートーキングの有効性のほうが高いと判断した。

〈表 6〉話す能力評価のt-分析

	フリートーキング			教科書		
	点数差の平均	t-値	P-value	点数差の平均	t-値	P-value
評価者1	8.6	5.0853	0.007055**	6	5.4772	0.005408**
評価者2	10.8	9	0.0008438***	7.2	7.0602	0.002123**
評価者3	8	6.532	0.002838**	0.8	0.1863	0.8613
評価者4	5.2	4.8702	0.008218**	5	1.7789	0.1499

*p<0.05、** p<0.01、*** p<0.001

5. 考察

学習者の第二外国語習得に影響を与えるのは教授法など外的要因と学習者内的要因がある。学習者内的要因とはモチベーション、個性、適性、学習スタイル、年齢、ビリーフ、学習ストラテジーなどを指す。今回の実験では授業方法の有効性を検証するために、学習者内的要因による影響をできるだけ抑えるようにした。電話授業の参加、継続、中断、時間帯の変更など、ほとんどを学習者本人の自由意志に任せ授業によるもの以外のモチベーションからの影響を少なくした。また、アンケート調査により、ビリーフ、遺伝などによる影響があまりないことを確認している。

フリートーキング群と教科書使用群の有効性について分析したところ、実験結果から話す能力、JPTにおける聴解、読解に関して全てフリートーキング群のほうが有効性は高いという結果が出た。

まず、教科書使用群で使用した教科書はほとんどの教科書に使われ

ているように、まず本文があり、次に文法の明示的表示、オーディオリンガル教授法の1つの手法であるパターンプラクティスによる練習、フリートーキングの問題が1課となっており、文法の定着をほとんどパターンプラクティスによって行うものだった。このように教科書使用の授業ではフリートーキングも行ったが、主にオーディオリンガル教授法によって授業が行われた。

次にフリートーキング授業はコミュニケーションによる意味交渉を行いながら、理解可能なインプットとアウトプットを行ってきたといえる。母語話者と学習者はインタラクションを行い学習者は母語話者から理解可能なインプットを手に入れる。そして学習者のアウトプットに対し母語話者からの否定的フィードバックや自らのアウトプットによって学習者は気づき、仮説検証などを行っていく。アウトプットを通して統語、文法に対しても学習者は意識するようになる。そして多くのアウトプットを行うことによって学習者の言語知識の自動化は進んで行く。このように学習者は言語を習得していく。

以上の2つの授業方法の違いが今回の実験結果の有効性の差につながったと考えられる。

そして、フリートーキングでは学習者が話したい内容を話すことができる。自分にとって好きな話、興味がある話をすることによって学習者は喜びを感じる事が予想される。喜びを感じると学習者の脳内でドーパミンが分泌されワーキングメモリの能力は向上し (McNab et al, 2009) 文法的知識などの宣言的記憶能力が上がる (Lee 2003; Crowell 2003)。すなわち、フリートーキングの授業では好きな話、興味がある話をする事で学習効率が上がる可能性が考えられる。

加えて、フリートーキングでは学習者の実力にあわせて、必要としている文法項目を学ぶことができる。このことも授業効果をあげる原因の一つだと考えられる。

以上のことから、電話授業における授業方法としてはフリートーキングの方が適していると考えられる。

話す能力に関して評価者の主観が入り、評価者によって若干点数に

ばらつきが見られたが、実験前と実験後の言語能力の向上が明らかに見られたことから実験の有効性には影響がなかったと判断した。

今回の実験ではフリートーキング群でJPTの読解の点数が向上していた。言い換えると、電話授業で使用したりスニング、スピーキング以外の技能への効果がフリートーキング群で見られたということである。しかし教科書使用群のJPTの読解の点数向上への有効性は見られなかった。教科書では行動主義のオーディオリンガル教授法であるパターンプラクティスなどを主に使用していることから、このことはオーディオリンガル教授方法による学習では、使用したりスニング、スピーキング以外の技能への効果が見られなかったということになる。

大石(1999)の実験では第1言語において4技能は相関性を持つが、第二言語において4技能は相関性を持たないという実験結果がでている。しかし高瀬(2010)は多読がリーディングスピード、リーディング力をはじめ、リスニング力、ライティング力、スピーキング力、文法力、語彙力などを向上させた例を報告している。また、門田(2002)は「外国語の学習において聴き取りの訓練が読解力へ転移がある」といっている。ここで注目したいのはインプットを中心とした授業では4機能の相関性が認められているということだ。

フリートーキングは、比較的、第一言語の習得環境に似ている。インプットとインタラクション、アウトプットによる気づき、仮説検証などは、幼児の言語習得過程でも起こっている。しかし第一言語習得においてパターンプラクティスなどの練習は行われない。

今回の実験でフリートーキング群で使用技能以外の技能に対し相関性が見られた理由の一つの可能性として、第一言語習得の環境とフリートーキングにおける言語習得の環境が似ていることが挙げられる。

いずれにせよ、教科書中心の授業では見られない4技能の相関性が、フリートーキングの授業では見られたという点からも、電話授業ではフリートーキングを中心とした授業を行う方が良いと言えるだろう。

6. 終わりに

電話授業は通常母語話者と1:1で授業を行われる。インタラクショ
ンを通して意味交渉を行い、理解可能なインプットを手に入れ、理
解可能なアウトプットを産出するには非常によい学習環境だといえ
る。電話授業においてはインタラクションを可能とするフリートー
キング中心で授業を行い、必要な文法項目はその都度指導するよう
にしたほうが効果的だと考えられる。大学の補助的授業としての電
話授業を考えたとき、フリートーキングを使用した電話授業では、
大学の本授業で学習した文法をその時に必要な文法として復習す
ることができる。このことは、学習者の文法習得に非常に有効だと考
えられる。

教室内での学習は多数のさまざまな学習者を対象に時間の制限があ
る中で行われるため、教科書を使用することが効果的だと思われる。
しかし授業中、教師はできるだけ目標言語である日本語で授業を行
い、学習者が教師に自由に意味が理解できないことを伝えられるよ
うな雰囲気を作り、多くのインタラクショが必要である。教師は学習
者に理解可能なインプットを与え、学習者の発言も目標言語で行わ
せるようにし、理解可能なアウトプットを行うように努力させることが
学習者の目標言語の習得により影響をもたらすと考えられる。

4技能の相関性についてだが、今回の実験では第一言語の習得環境
に近いフリートーキングで各技能の相関性が認められた。又、前述
のとおりインプットを中心にした授業によって各技能の相関性が見
られていることから、第一言語の習得環境に似た授業方法を使用す
ると4技能の相関性が現れるのではないかと推測した。第一言語習得
の際には普遍文法のような生得性の言語習得装置もしくは機能が働
くと言われているが、第一言語習得の環境に近いフリートーキング
のような授業でも、生得性の言語習得装置もしくは機能がある程度
働いてそれが4技能の相関性につながったとは考えられないだろう
か。4技能の相関性に関しては以後の課題として取り上げていきたい
と思う。

最後に話す能力の測定において、以後、聴覚的判断だけでなく話す能力の一つである発音の判定方法として音声学的分析などを行う必要性があると考えられる。

参考文献

- 강봉식·최영숙 외 2인(2003) 『NEW일본어회화첫걸음』 시사일본어사, pp.1-258.
 권미영(2007) 「전화 영어회화 학습이 성인 남자의 구두 의사소통 능력에 미치는 영향」 서강대학교 교육대학원, pp.22-24.
 문광자(2010) 『타노시이일본어상』 넥서스, pp.1-189.
 _____(2010) 『타노시이일본어하』 넥서스, pp.1-205.
 박은영(2003) 『원어민과의 전화영어학습이 중학교 영어 학습자의 구두의사소통 능력 및 정의적 측면에 미치는 영향』 이화여자대학교교육대학원 석사학위논문, pp.93-95.
 반규현(2012) 『대학생들의 전화영어회화수업에서의 학습 참여도와 동기에 따른 영어회화능력 향상도 연구』 중앙대학교 교육대학원 석사학위논문, pp.52-55.
 오현정 타(2006) 『다이나믹 일본어step1』 다락원, pp.1-167.
 _____(2006) 『다이나믹 일본어step2』 다락원, pp.1-155.
 윤강구(2011) 『일본어 어떻게 가르칠 것인가』 지식과 교양, pp.22-31, pp.93-102.
 정숙경(2012) 「전화 영어 수업 분석과 영어 말하기 능력 증진 효과에 대한 연구」 『언어학연구』제17권 3호, 한국언어연구학회, pp.69-88.
 JPT초고수위원회(2010) 『시나공 JPT 실전테스트』 길벗이지톡, pp.16-52.
 나가하라나리카쓰(2008) 『우키우키 일본어 회화코스 초급편』 넥서스, pp.1-104.
 _____(2008) 『우키우키 일본어 회화코스 초중급편』 넥서스, pp.1-168.
 _____(2008) 『우키우키 일본어 회화코스 중급편』 넥서스, pp.1-168.
 大石晴美(1999) 「言語情報処理の多次元的プロセスの探求 - LisningとReadingにおける情報処理方法について」 『ことばの科学』第12号, 名古屋大学国際言語文化研究科, pp.93-112.
 門田修平(2006) 『第二言語理解の認知メカニズム - 英語の書きことばの処理と音韻の役割 -』 くろしお出版, pp.69-81.
 白畑知彦・若林茂則・村野井仁(2010) 『詳説第二言語取得研究 - 理論から研究法まで -』 研究社, pp.136-137, pp.146-149, pp.152-155.
 鈴木孝明・白畑知彦(2012) 『言葉の習得 - 母語獲得と第二言語習得 -』 くろしお出版, pp.153-174.
 ゴルタン・ドルニュエイ著米山朝二・関昭典訳(2005) 『動機付けを高める英語指導ストラテジー』 大修館書店, pp.10-11, pp.122-131.
 高瀬敦子(2010) 『英語多読・多聴指導マニュアル』 大修館書店, pp.33-44.
 村野井仁(2006) 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』 大修館書店, pp.122-123, pp.132-134.

- Fiona McNab, Andrea Varrone, Lars Farde, Aurelija Jucaite, Paulina Bystritsky, Hans Forssberg, Torkel Klingberg1.(2009) "Changes in Cortical Dopamine D1 Receptor Binding Associated with Cognitive Training". *Science 6 February 2009*: Vol. 323. no. 5915, pp.800-802.
- Horwitz,K.E.(1987) "Surveying student beliefs about language learning. In A. Wenden & J. Rubin (Eds.)". *Learner strategies in language learning*. Englewood Cliffs, NJ : Prentice Hall, pp.119-129.
- Krashen,S.(1982) *Principles and practice in second language acquisition*. Oxford: Pergamon, pp.9-26.
- _____ (1985) *The input hypothesis: Issues and implications*. London: Longman, pp.1-32.
- Long,M.(1983) "Linguistic and conversational adjustment to non-native speakers." *Studies in Second Language Acquisition*, 5,2, pp.177-193.
- _____ (1996) "The role of the linguistic environment in second language acquisition." In W.C. Ritchie & T.K. Bhatia(Eds). *Handbook of second language acquisition*. San Diego, CA: Academic Press, pp.413-468.
- Namhee, Lee(2003) "The Neurobiology of Procedural Memory". *The neurobiology of learning*, pp.43-73.
- Shelia,E, Crowell(2003) "The Neurobiology of Declarative Memory". *The neurobiology of learning*, pp.75-110.
- Swain,M(1985) "Communicative competence:Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development". In S.Gass & C.Madden (Eds.), *Input in second language acquisition*. Cambridge, MA: Newbury House, pp.235-253.
- _____ (1995) "Three functions of output in second language leaning". In G.Cook & B. Seidlhoffer(Eds.), *Principles and practice in applied linguistics: Studies in honor of H.G. Widdowson*. Oxford: Oxford University Press, pp.125-144.
- Taff,A(1997) *Learning ancestral language by telephone Creating situations for language use*. Anvik, AK : University of Alaska, pp.40-45.
- Vallerand,R.J(1997) "Toward a hierarchical model of intrinsic and extrinsic motivation". *Advances in Experimental Social Psychology*, pp.271-360.

성 명(한 글) : 아키야마토모코 · 최영숙

(한 자) : 秋山朋子 · 崔英淑

(영 어) : Akiyama Tomoko · Choi, Young-Sook

논문영어제목 : A Study on the Japanese Language Class over
the Phone and the Effectiveness of its Method

소 속 : 충남대학교 인문대학 일어일문학과 초빙교수 · 충남대학교 인문대
학 일어일문학과 부교수

E-mail : tomoshi@hanmail.net · yschoi33@cnu.ac.kr

투 고 일 : 2014년 1월 10일

심사개시일 : 2014년 1월 13일

심사완료일 : 2014년 2월 4일